
旧約から新約へ

マムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旧約から新約へ

【Nコード】

N4781Z

【作者名】

マムー

【あらすじ】

旧約から新約へつながる物語

そのいち これは新約の内容をガン無視して、22巻からその後を勝手に捏造した小説です。
苦手な方は逃げて下さい。

それに 近頃類を見ない駄文となっています。ご注意ください。

そのさん オリキャラは出てきますがあまり出てこない、てかぶつちやけ最初と最後以外は声の出演以外ありません。それゆえあまり活躍しません。

そのよん 各能力には作者の勝手な解釈があったり、いきなり作者が捏造した新しい魔術が出てきたりと、色々超展開です。

そのご キャラ崩壊と見られる場面もいくつかあります。

これらの点をあらかじめご了承ください。

ブログ 消えたヒーローの行方(前書き)

二回目の投稿、てか初の連載小説です。温かい目でご覧下さい。

プロローグ 消えたヒーローの行方

暗闇の中に二人の男がいる。一人は座り込んでいて、両手は壁に拘束されている。意識がないのか、体はぐったりしている。

もう一人はその男を見下ろしているが、その男の目にあるのは、怒りや侮蔑といった感情はなく、むしろ親愛の感情が多く含まれている。

「お前がここまで来たのは久しぶりだな……………」

その声とともにどこからともなく明かりがつき、ここが屋内であることがわかる。だが、そこは部屋というより広間というような大きさとなっている。

「できればもう少しお前といたいが、そんなゆっくりしてられないんだ。彼らがもう目覚めてしまうからな」

そう言つとその男は、その広間の真ん中に向かって歩き出した。しかし、途中で足を止めると、言葉を漏らす。

「悪かった……………もつと早くこの世界と出会えたらお前の道を作れたのに……………」

その声は罪悪感に満ち、その表情は無力感に苛まれている。

「だけどお前はよくやった。よくこれまでの道を走り切った。お前はそれを誇れる。これからも変わらずに走り続けて欲しい」

声を漏らせば漏らすほど、罪悪感が増幅し、無力感が増大する。

しかし、男は言葉を紡ぐ事をやめない。それはまるで罪の告白のようだった。神の子に向かつて、己の罪を懺悔する教徒達。そんな風景が連想された。

「だが、お前はこれからの世界を生き抜けない。これまでが『最善』だったからこそ、これからは『最悪』が続いていく……………」

そこで彼は一度言葉を止める。その空白に込められている、全ての負の感情。

それらすべてを押し殺し、彼は、最後にできる限りのもつとも明るい表情を作った。

「そんな流れは俺が止める。俺が最悪を最善に変えてみせる。だからもうちょっと休んでいてくれ」

『当麻』と。

そして彼は広間の真ん中に行き、一瞬で姿を消した。

これは、旧約から新約へと繋がる前の、本来はありえない物語。

プロローグ 消えたヒーローの行方（後書き）

いかがだったでしょうか？

いきなり変な奴の登場ですがこんなムチャを何回も続けます。許して下さい。

意見、感想などがあると非常にうれしいです。

第一話 英雄が消えた痛み（前書き）

大したストックもないくせに続けて投稿です。

第一話 英雄が消えた痛み

第三次世界

学園都市とロシアの間で繰り広げられたこの戦争。

学園都市にもロシアにも、パイプを持つ土御門はもちろん闇の中で動き回り、それなりに

ヤバイ橋も渡るつもりだった。それに備えている準備もしていた。だが、そんな彼に伝えられた仕事の内容は、

『一方通行（アクセラレ・タ）の抜けたグループを率いて、学園都市内部のロシア側に与する人間、組織を排除せよ』

といった簡単なものだった。それに学園都市に住んでいて、大戦の内容を知る者なら、わざわざ負ける可能性の高かったロシアに味方するものなどそうはいない。したがって彼の戦時下の生活は通常時とほとんど変わらないものだった。

そして、戦争が終わった。

だが、イギリス清教からの一本の電話によって彼にもたらされた一つの情報は彼の予想を大きく裏切るものだった。

「カミヤんが死んだ。だと!？」

それは、他の誰でもない、彼の大切な友人の死だった。

「正確には、行方不明と言いけるところかしら」

彼にその事実を伝えたのは、イギリス清教第零聖堂区『必要悪の教会』ネセサリーウスアーケレンシヨツ最大主教ローラ・スチュアート。

本来ならば土御門は、最大限の礼節を持って対応しなければならぬレベルの人間である。

「『ベツレヘムの星』が落ちた場所はわかってるんだろ！？十字教三大勢力の部隊が向かったんだろ！？それでどうしてみつからないんだ！！」

にもかかわらず、土御門はまるでへまをした部下を叱るような口調で怒鳴り散らかした。

その事を毛ほども気にした様子もなく、ローラ・スチュアートはあくまで事務報告をした。

「さあ？周辺の人々に保護されたりけるのか、それとも海の底へ旅立ちたりているのか　そうそう三大勢力の会議でこれからの彼の扱いはイギリス側が一任することになりしてよ」

それを聞いて土御門は少し安心してしまった。上条はイギリスにとつて恩のある人間だ。イギリス清教ならそう簡単にあいつのことを諦めたりしない。と

「じ、じゃあカミヤんの搜索はどうなるんだ？」

しかし土御門は忘れていた。今電話越しに話している人物はどのような人物かを。

「そうね、そのことで頼みたきことが二つほど。一つは神裂がシヨックでおかしくなっているのよ。今から替わりたるから元の神裂

に戻してくれぬ？神裂がこうだと天草式と女子寮の奴らが動かしかくくなりていて、困りているのよ」

「あ、ああ。それはいいがもう一つは？」

土御門はそれを聞いた瞬間、とても嫌な予感がした。まるで聞いてはいけない何かを聞いてしまったような。触れてはいけない場所に触れてしまったような。

土御門はそれが自分の考えすぎであることを必死に祈ったが、

「ああ、それはただ単純に上条当麻の死を学園都市の皆に伝えてもらいたい。というだけのことよ」

それはかなわぬ祈りであることを思い知らされた

「なッ！……………なん……………だと…！？」

そこで土御門は驚くと共に思い出した。今話している女は、あの必要悪の教会のトップ、ローラ・スチュアートであることを。彼女が、恩なんてもので動くことはないということ。

「ただ死亡届出すだけならお前に用はないわ。でも、それだと彼の死に疑問を持つものが現れるかも知れぬ。それで変に嗅ぎまわれども困りけるの。だから、お前にうまく説明してもらいたいのよ。こちらは、あと一週間を目途に上条当麻の搜索を打ち切りたまふわ……………だからどんな言い方をしても構わぬ。一週間以内に学園都市の人間が誰一人上条当麻の死を納得できるようにするのよ」

一週間、七日。確かにそれだけたって何の情報もないのなら、生きていく可能性はかなり低くなるだろう。ローラの言っていること

は間違っではないはずだ。
だがそれでいいのか。

上条当麻という希望を、可能性という言葉で諦めていいのか。

土御門がその判断をつきかねているうちに

「ああ!!もうこんな時間!!いけなし土御門!!私はこれから清教派の代表として、会議に出なければいけなしなのよ!!では、頼んだわよ!!」

そういうとローラは電話越しの奴に「神裂を呼びて!!」という
とそれきり気配がなくなってしまった。

「おい!!こっちはまだ話が!おい!おい!!」

いくら怒鳴っても返事は来ない。諦めて待っていると

「……はい、お電話変わりました。神裂です」

という神裂の声が聞こえた。確かにこれはまずい。と土御門は率直に思う神裂は、普段はもつと張りがあり、ハキハキとした声だったはずだ。だが今の神裂は声に芯がない。いや、声というより心に芯がないという状況か。知らない間に自分も含めた皆の中で上条当麻の存在が大きくなっていった事に改めて気づかされる。

「やーねーちゃん、すっげえしけた声してるにやー。何があったか知らないけど、そんな声じゃ天草式の奴らもテンション下がるぜい？」

「え？カミヤんが死んじゃった？何バカなこと言ってるんだぜい、ねーちん。聖人の本気の蹴りくらった後にその聖人相手に説教する余裕のある奴が、ちよっと北極海に落ちたぐらいで、死ぬもんですたい。どうせ今頃、近くの民間人の美人さんに救助されて、ウハウハやってるから、心配する必要なんかねーよ」

だが、土御門は嘘をつく。たとえ自分がどれだけ傷ついても。上条当麻が戻ってきたときに、皆が笑顔で上条のことを迎えられるように。彼がいた世界を、これ以上壊さぬように。

第一話 英雄が消えた痛み（後書き）

最大主教さんの口調メツチャむずい……………

しつこいようですが、意見、感想待ってます。

第二話 奪い取った平和（前書き）

30秒悩んだ結果、ストックを使いきることにしました。

大戦後の主人公たちの様子です。

第二話 奪い取った平和

「ほらー！朝だよー！早く起きなー！！ってミサカはミサカはあなたの上に乗っかってみたりー！！」

「……………うるせエ、寝させる」

なんでこいつはこんなに元気なんだ。と一方通行は純粹に思う。

アクセラレータ

一方通行たちが学園都市へと帰ってきたのが二日前　　ちよう

ど第三次世界大戦が終結した日である。そして『電話の男』と交渉し、『闇』を解体させ、ついでに冥土返し（ヘブンキャンセラー）に打ち止め（ラストオーダー）と番外個体のことを診せに行ったのが前日のことである。

彼としてはとても疲れている。もう少し寝ていたい。ていうかこいつは昨日精密検査を受けたはずなのになんで朝からこのテンションなんだ。女つてのは皆そうなのか。そういやここに帰った時にも黄泉川に全力で殴られ、芳川にはスタンガンの一発をもらいそうになった。二人曰く「何も言わずにここを飛び出した罰」らしいがそれには重すぎると思う。

俺の周りの女限定でおかしいのか、なら俺は相当不幸な人間だなア。

と、まどろみの中なかなか動かない頭で考える一方通行。アクセラレータ そのまま二度寝を決め込もうと思ったのだが、

「チツチツチ。甘いよ上位個体。奴の眠りの深さは知ってるでしょ？だっただらもつと刺激のある起こし方しなきゃ」

「？刺激のある起こし方って？ってミサカはミサカはミサカネットワークで検索しながら目の前のあなたに問いかけてみたり」

明らかに不穏な会話が聞こえる。だが、総じて人間とは寝起きのしかも不本意な起こされ方をした状態では余程のことがない限り睡眠を優先するものだ。学園都市第一位の能力者である彼も例外ではなく、どうせ大したことじゃねえだろ。ともう一度睡眠へと頭を沈めた。

「ふふーん、では教えてしんぜよう。それはズバリ、おはようのキスー！！これに勝るものはないよー！！」

「ふ、ふえー！？そ、それはまだ子供なミサカには早いかもってミサカはミサカは外見年齢を盾に逃げにまわってみたり……………」

「ふうー、仕方ない、ではこのミサカが代表して……………
アクセラレ
一方通行、起きて？」

「ひぎゃー！！あなたの純情が奪われるところをミサカは見てられないってミサカはミサカは手で顔を覆いつつも、指の間からしっかり確認してみたり！！」

前言撤回、余程のことがあった。

「ナニをしてるんだお前らはアアアア！！！！」

という咆哮とともに布団を勢いよく持ち上げて起きると、「ひよわわ！？ってミサカはミサカはミサカはベッドの上から転げ落ちてみたり！？」

という声を出しながらベッドの下で目をまわしている打ち止め（ラストオーダー）と、彼が起き上がる直前にベッドから離れたので、被害ゼロの番外個体がいた。

彼はとりあえず諸悪の根源である番外個体のほうに文句を言う。

「おい、頭の調整はまだ終わってねエのかア」

「いやいや、ミサカの頭は調整不要の正常だよ？」

「そうかア、お前は正常な状態でもトチ狂った行動しちまう程度のスペックだったのかア。悪かったなア、すぐにあの医者にアップデートするように言ってくる」

「おいおい、ただの目覚ましのポケでしょ？それくらい理解してよ。それとも、あなたのにはもっと幼い人がやった方が良かった？具体的にはそこに転がっているのとか」

「ンなわけあるか、めんどくせエ。朝飯なんだろオ？着替えるからさっさと出てけ。もちろん、タンスに仕込んだ隠しカメラを片付けてなア」

番外個体は一度舌打ちすると、素直にタンスからカメラを回収する。一方通行は油断も隙もありやしねエ。とひとりごち、彼女たちを部屋の外へ追いやろうとする。

「あなたが来るまで待つてるから、早く来てね。ってミサカはミサカはお願いしてみたり」

「チツ、わかったから早く出てけ」

そういうと彼はドアを閉めた。ドアの向こうでミサカワリスト番外個体が「あれはツンデレって言うてね、自分の感情をなかなか表に出せないかわいそうな人だから」とか言っているが気にしない。

彼は窓のところまで歩くと空気の入れ替えの為に窓を開ける。すると冬場特有の身を切るような冷たい空気が彼を包む。空を見上げると青い空。今日も晴れだろう。

着替えを終えてリビングに向かうと打ち止め（ラストオーダー）だけでなく、他の全員が彼を待っていた。

文句を言う打ち止め（ラストオーダー）を適当に受け流し、テーブルへ着く。そこで聞こえる「いただきます」の声。基本的には打ち止め（ラストオーダー）と黄泉川と芳川の声しか聞こえない。

だが、打ち止め（ラストオーダー）には確かに聞こえた。隣に座る一方通行がアクセラレータとても小さな声で「……いただきます……」と呟いたのを。

打ち止めの満面の笑みを見て、一方通行はまたしても、「チツ……めんどくせエ」と呟いた。

第二話 奪い取った平和（後書き）

この小説が今後どんな展開になるかまったくわからない。

どんな小さなことでもいいので、意見、感想等を書いて頂けると、非常にありがたいです。

第三話 取り戻した平和（前書き）

大戦後の主人公達の様子その2です。

第三話 取り戻した平和

浜面達が学園都市へ帰ってきたのはつい昨日ことだ。その日のうちに電話の女から連絡が入り、浜面をアイテムの正規構成員にするとは言われたが、浜面達が素養格付パラメータリストを持っていることには全く触れられなかった。麦野曰く「こっちは自分から奴らの監視下に入るんだ。奴らも変に刺激したくないんだろ」ということだ。

そして、今日。とりあえずいつものレストランに新生アイテム四人が集合し、今後の事を話す事になった。

テーブルに通され、真つ先にソファに座った麦野の一言。

「とりあえず浜面、ドリンクバーお願い」

ドリンクバーの往復係

それが浜面がアイテムの正規構成員になってからの初仕事だった。

「……………変わってねえ……………」

浜面は全員分のコップを乗せたお盆を持ちながら、そう一人ごちた。

正直に本音を言うと浜面は、正規構成員になったことで扱いが少しは変わると思っていた。流石に他の三人と同じ扱いになるとは思っていなかったが前と同じようなドリンクバー係になるとは思っていなかったのだ。

「なのに、なんで何にも変わってねえんだよ……………」

まあしかし、ここでそんな文句を言っても仕方ない。麦野たちに言っても、物理的に黙らされるだけだろう。

なので、今浜面がとるべきもつとも頭のいい行動は、できるだけ早くドリンクを届けることだ。ことなのだが、

「うーん、『ヤシの実サイダー』のブレンドには、『人参カルピス』と『豆腐コーラ』、どちらがいいんでしょう…」

(知るかあああ！！頼むから早くどいてくれ！！)

頭に花飾りをつけた妙なやつがいて、ドリンクバーが使えない。

その妙な奴は、グラス片手にドリンクバーをうろろしているの
で、浜面は四人分のドリンクを入れる事が出来ない。

声をかけて先に入れさせてもらおうにも前の奴は、時々決めたよ
うなそぶりをしつつも、考え直して悩む。というサイクルを延々と
続けているので、声をかけづらい。

何も出来ないうちに、時間だけが過ぎていく。

(まずい、このままじゃ絶対怒鳴られる……………しかもこの位置から
じゃあいつらの位置が見えない！！)

それが余計に不安を仰ぐ。ドリンクバーの上にある液晶テレビを
見ると、ニュースで何やら研究所が原因不明の爆発を起こしたとか
言っている。よほど大きな事故だったのか、かなり大きな事故とし
て扱っているので、恐らくこのニュースが終わるまでに戻らなけれ

ば怒鳴られ、嫌みや原子崩し（メルトダウン）を軽く頂いてしま
うだろう。というか、彼女たちのイライラ蓄積段階によっては、今
すぐ戻っても窒素パンチの可能性がある。

目の前の花飾り少女は、まだうーんうーん唸っている。

（……………まだまだかかるな……………よし……………）

花飾り少女がまだ悩むと判断した浜面はとりあえず麦野たちの様
子をつかがうこととする。

（目が合うといやだからなー。こっそりこっそり）

できるだけ気配を殺してテーブルをつかがうと、三人は向き合っ
て何かを話している。

（よかった。とりあえず待ちくたびれていることはなさそうだ…
……………ん？）

三人の様子がおかしい。明らかにジュースを待っている間の雑談
とは思えない雰囲気である。

（いったい何が……………ツ！！？？麦野！！？？）

少し見ていると、麦野がいきなり頭を下げ出した。絹旗も滝壺も
驚いているようである。

（あれは……………謝ってる？……………麦野が？……………麦野が頭下
げて謝るなんて今までは一度も見た事ねえ。それなのになんで…
…なにが……………）

そこまで考えて答えが出てきた。簡単なことだった。『アイテム』と『スクール』の抗争から始まったいくつもの事件。その過程で、麦野は二人を傷つけている。恐らく彼女はそのことを謝罪しているのだろう。浜面をドリンクバーに追いやったのは浜面には聞かれなかったからか。

(ふざけやがって……………)

浜面は自分の感情が怒りに染まるのを感じる。

だが、この感情のまま戻ってはいらぬ争いを起こしてしまう。

だから、浜面はドリンクを入れに戻る。花飾り少女はいなくなっていたようだ。

「悪い、遅くなった」

自分は何も知らない。と見せかけるために浜面は、できるだけ何もなかったような声を出す。

「あ、ああ……………遅えよボケ。いつまで待たせんだ」

麦野の様子は変わらない。それが、さっきの光景を知っている浜面にはとても痛々しく見える。

ここで麦野が完璧に普段通りの姿を見せ、遅れた浜面を怒鳴り散

らせば、浜面も何も言いだせなかったかもしれない。
しかし、明らかに普段と違う麦野の姿に、浜面は確信する。

「……………はあ……………麦野」

「な、何よ」

改まって呼ばれて少し驚いたのかいつもなら呼ばれてもこっちを
向きもしない麦野がこちらを向く。

（つたく、そんな殊勝なの似合わねえっての）

そんなことを思いながら浜面はおもむろに麦野の頭に手を置くと
優しくなでた。

麦野は一瞬何が起きたのか分からなくポカンとするが、一秒後には
目線を自分の頭の上に戻し、浜面が何をしたのかを知り、みるみる
顔が怒りに染めていく。

「……………は？……………んなっ！？…浜面てめえ！！いった

「無理するな。麦野」

だから浜面は言葉を繋げる。いつまでたっても馬鹿なプライドを
持ち続けるこの女を助けるため。

「わかってるよ。お前がさっきこいつらに今までの事を謝ってた
のは。わかってるよ。そのシーンを見せたくなくて、俺にドリンク
バーを押し付けたのは。全部、わかってるんだ」

「……………」

「きつとお前も思うことがあって、俺を追いやったんだろう。その心情は分かる。でも、お前は一つ忘れてる」

浜面はそこで一度言葉を切った。そこにあるのは迷い。正直、次に続く言葉を、浜面は考えていない。なのでそのままの勢いで、言葉を紡ぐ。

「俺たちは『アイテム』だ。お前たちにとってはまだパシリかもしんねえけど、俺も『アイテム』なんだ……………えっと……………だから、俺に気を使わなくていいっていうか……………俺をもっと頼っていいっていうか……………」

だんだん言葉が出なくなってしまふ浜面。頭の悪いチンピラでは、ここが限界なのだ。

最後までうまく言えなかったからか、麦野はうつむき、肩を震わせて黙り込んでいる。このままじゃさすがにまずいかと、浜面は次に続く言葉を必死に考える。

そこで浜面はある事実気付く。

周りの絹旗と滝壺が、やけにドン引きした目で自分を見ている事に。

その事に、浜面が気付くと同時に、絹旗がやはりドン引きした声

とともに告げる。

「は、浜面……………何か超勘違いをしていませんか？」

は？という間抜けな声が無意識に出てしまう浜面。しかし絹旗は構わず続ける。

「と、とりあえず麦野は私たちに超謝罪とかはしていませんよ？」

その言葉の意味を理解するのに、たつぷり五秒かかった。

そして、気付く。自分が知らない間にとんでもない死亡フラグを立てていることに。

「で、でも！ちょっとこっちの方を覗いてみたら麦野が頭を下げてたじゃん！！あれは何だったんだ！！」

「あ、あれは麦野がケータイを落したから超拾っていただけですよ？」

つまりは勘違い。普通の勘違い。ただの勘違い。たったそれだけの話だった。

麦野がスツと顔を上げる。

その姿を視界の端で確認した浜面は、全身からいやな汗が出るのを感じた。

やばい、殺られる。

浜面の全身がそう叫んでいる。

「絹旗、滝壺、ジュース全部飲んで」

しかし、浜面の予想を裏切り、麦野は無表情で絹旗と滝壺に命令する。

二人が空気を読んで飲み終わるのを確認し、自分もジュースを一気に飲み干すと、浜面にグラスを三つ渡す。

「今の事は忘れるから。とりあえず、ドリンクバーからやり直そうか。浜面」

浜面のその時の動きの素早さは、世界大戦中でも見られなかった。と滝壺は語る。

「あれで良かったんですか？麦野」

そう問いかけたのは絹旗である。浜面はもう一度ドリンクバーに行っていて今はいない。

「うん、いきなり言われてビビったから、ナイスフォローだったよ」

麦野は、言葉通りにホツとした表情をしているが、絹旗の表情は

どこか不完全燃焼気味だ。

「…………正直な話、麦野が一番迷惑をかけて、一番色々言わなくちゃいけないのは私たちではなく超浜面だと思いますけど」

絹旗がそう言うと、麦野は、ホツとした表情をわずかに曇らせ、下を向く。

そう、浜面が見て、読み取ったもの、それは間違いでも、勘違いでもなく、真実だった。

「…………うん…………分かってる」

分かっている。分かってはいるが、どうしてもできない。

プライドが邪魔をするとかいう訳ではない。超能力者としてのプライドは、あのロシアで浜面が粉々に打ち砕いた。だから、絹旗達にも正直な気持ちで色々な事を話し、そして心の底から謝ることが出来た。

なのに、どうしてもできる気がしない。自分の頭でシュミレーションしてみても、全く上手くいかない。頭の中でできないなら、実際に出来るわけがない。

それはまるで、海岸から200キロ離れた孤島に、遠泳で行け。と言われたような気分だった。ゴールの島自体は見えるのだが、そこまでの道のりが、方法が、手段が、全く想像できないのだ。

そうして麦野は、何故自分が躓いているのも分からないまま、悩んでいた。

「さつきはいきなり過ぎてつい誤魔化してしまいましたけど、やっぱり」

「私は、別に謝らなくていいと思う」

そこで口をはさんだのは滝壺。今まで全く話に参加していなかった滝壺の、予想外の答えに、二人は黙りこむ。

「はまづらは、いつも悩んでた、後悔してた。初めにむぎのを殺しかけた時から『麦野だって一人の女の子のはずだ、それにあんな酷いことをしてしまった。自分はそれでいいのか』って、ロシアに
いる間はずっと悩んでた。多分今でもちよつと気にしてると思う」

それは、二人が初めて知る事実だった。

そして、麦野は、そんなことに悩んでいたのかと呆れると同時に、自分は今まで浜面にとんでもない迷惑をかけていたことを改めて知らされ、胸が締め付けられる。

（私は、アイツを殺すことしか考えてなかったのに、アイツは、そんなことまで考えてたのか）

それは勝てない訳だ。

「それなのに、むぎのが謝ったらはまづらは、多分いっぱい自分を責めると思う。だから、やめてあげて。はまづらの前だけでは、いつものむぎのでいて。お願い」

その言葉で、麦野は気付く。

確かに正直に気持ちを伝えれば、外見的には丸く収まり、自分も少しは気が楽になるかもしれない。

だが、伝えられた側　それが浜面のような自分を殺そうとした奴の事さえも気にかけるお人好しならば、そのことを引きずっていつてしまう。

ならばここでは、浜面をいつもの日々に戻すことが、自分に出る償いなのではないか。

そんな話をしているうちに、浜面が戻ってくる。

今日は皆でショッピングにでも行くか。浜面も、荷物持ちをするなら、連れてってやるう。

情けない顔をして戻ってくる自分の英雄ヒーローを見ながら、麦野はそんなことを考えていた。

第三話 取り戻した平和（後書き）

書きかけていたもの投稿し、本当に次いつ投稿できるかわからなくなつた。

どんな小さなことでもいいので、意見、感想等を書いて頂けると、非常にありがたいです。

行間 とある会話より（前書き）

待ってないと思うけどお待たせしました。

原作パクって行間です。

行間 とある会話より

黄泉川に買い物を頼まれた。

一方通行は、番外個体と打ち止めと、スーパーへの道を歩いていた。

「つつかよオ、なんでお前たちまでついて来てんだ」

「久しぶりの学園都市を満喫したいのだからって、ミサカはミサカははしゃいでみたり！」

「なんか黄泉川に『ここでの生活に慣れるじゃん』って言われてね。仕方なく」

「だったらためえらで行けばいいじゃねエか」

「あなたにも一緒に来て欲しいのーって、ミサカはミサカは現状維持を求めてみる！」

「このミサカも第一位がいないとムラムラがおs」下らねエこと言っでンじゃねエ」

「ミサカと上位個体で、扱いに差があると思うなー」

「ためエもちょっとは可愛げがあつたら同じ扱いにしてやんよ」

「そ、それはミサカの事を可愛らしい女の子だと明言したという事でもいいの！？ってミサカはミサカはいきなり降って湧いたチャン

スに驚いてみたり!!」

「……………ハッ! ミ、ミミミミサカは別にそんなのいらぬし!!」

「オイ……………何飛躍してやがる。今のは言葉のあやだろオが」

「えへへー、そんな照れなくていいってミサカはミサカは……………アレ? どうしてあなたの手はそんなチョップの態勢に入ってるのって、ミサカはミサカは後ずさりしながら尋ねてみたり」

「た、ただ……………可愛らしいミサカにあなたがメ、メロメロになるのなら! あなたと上位個体の仲を引き裂くためにそんなミサカを演じてあげない事も無きにしてもあらずなんだけどな! ?」

「いやア? 自称『可愛らしい』打ち止めさんには特別に『一方通行チョップ』能力使用 ver. 』をお見舞いしてあげようと思つてなア?」

「あ、アハハハって、ミサカはミサカは愛想笑いを浮かべながら戦略的撤退!!」

「いや別に変な意味はないよ! ? ただこのミサカは悪意にしたがつて行動するだけだからあなたが上位個体に嫌われたくないって思うならミサカは喜んで」

「チッ、さつさと買い物終わらせんぞ」

「やっぱりあなたは優しいって、ミサカはミサカ あれ? なんか今すごい白いのが……………ねえねえ、あなた見た? アレは絶対

隕石だよ！って、ミサカはミサカはにわか興奮してみたり！」

「隕石だア？……ンなわきゃねエだろ。」

「でも見てみなければ分からないって、ミサカはミサカは暗に連れて行けと伝えてみたり！」

「あ、あれ？ミサカは何が言いたいんだろう？……えーとつまり　　ッ！……い、いいや別にそんなじゃねーし……ミサカは別にモヤシのことなんて何とも……」

「……めんどくせエ、自分で行け」

「あなたに連れて行って欲しいのーって、ミサカはミサカは駄々をこねてみたり！てか遠すぎる……」

「あーうざってエ」

「とにかく行くのって、ミサカはミサカは……」

「と、とにかく……いいからミサカを特別扱いしろおおおお！
！……」

行間 とある会話より（後書き）

今回は行間ということ、会話文メインでやってみました。

ただ、それだと誰がどのセリフなのかイマイチわからないことに気がきました。

とりあえず、途中から番外個体のセリフは全部独り言です。

技術もない癖にこんなことやって申し訳ないです。

反省します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4781z/>

旧約から新約へ

2012年1月2日00時48分発行